

# 花巻随想 ～「思い残し切符」のゆくえ

若林区中央市民センター長  
村上 佳子



昨年暮れ、岩手の花巻市を訪れる機会がありました。花巻といえば宮澤賢治が生まれた町、新幹線の新花巻駅と東北本線在来線の花巻駅、どちらも駅に降り立ったとたん賢治作品のモチーフが立ち現れ、町中の随所に賢治さんの気配が佇んでいます。

宮澤賢治といえば、以前勤務していた仙台文学館で2004年に開催した開館5周年記念展示を思い出します。展示の企画が決まる前から学芸員とともに何度となく花巻を訪ね、宮澤賢治記念館をはじめ賢治資料を大切に保存されているご関係の方々にお目にかかりながら、記念展示の準備を進めました。あれから10年、久しぶりの花巻です。

宮澤賢治は仙台文学館初代館長の井上ひさしにとっても重要な作家でした。かつての文章講座で井上流文章指南があり、それによると「日本文学全集でも世界文学全集でもまず読んでいくこと。その中で気に入った作品があったらその作者のものを全部読んでいくこと。次はその作者の真似をしてその作者になったつもりで書いていくこと。そうするとどうしてもその作者とは違う部分が出てくる。その部分が自分のものになる。」とのことでした。そして、ご自分もその昔、宮澤賢治になったつもりで書き、「グスコブドリの伝記」のような作品ばかり書いていたと語っていたのを覚えています。特別な賢治ファンではなかった私は、井上ひさしを通して宮澤賢治を見てきたような気がしています。誰もが知る賢治

を改めて取上げるのも面映いのですが、花巻行きと前後して井上ひさしが書いた賢治の評伝劇「イーハトーボの劇列車」の再演を観る機会にも恵まれましたので、今回は宮澤賢治に触れてみたいと思います。

「銀河鉄道の夜」「風の又三郎」などの童話で知られる宮澤賢治は、明治29年現在の花巻市に生まれます。宮澤家は、質・古着商を営む地域経済の中心的存在で、長男の賢治も勉学より商家を継ぐことを求められ、当初は高等学校への進学もかなわなかったといひます。ちなみにこれは、仙台の詩人土井晩翠にも通じ、ともに質屋に生まれ商家に学問は不要と祖父に進学を認められなかったこと、また、やがては進学がかない独自に文学への道を歩んでいくことも共通しています。もちろん、その生涯の長さや生き方は大きく異なりますが。

宮澤賢治は、芸術・農業・科学・宗教的思想への想いに突き動かされるように、37年の生涯を駆け抜け、その人物像は作品とともに今なお多くの人々を魅了し続けています。「雨ニモマケズ」「永訣の朝」をはじめとする詩、教科書にも取上げられる数々の童話、そして全集に収められている科学評論などその著作の多くは賢治の没後出版されたものですが、繰り返し新たな本が編まれ広く読み続けられています。宮澤賢治について書かれた本は実に多く、熱心な読者とは言えない私はほとんど読んではいないのですが、井上ひさしの次の文章が、現在にも通じるよ

うで印象深く胸に刻まれています。

「…芸術家、科学者、宗教家の三つに  
絞り込むことにします。するとなにや  
ら賢治の姿がくっきりと浮かび上がっ  
てくるような気がするのですが、どう  
でしょうか。

芸術家賢治の、熱に浮かされて独り  
よがりな部分を科学者賢治が冷静に批  
判する、冷たい理論だけを尊しとして  
暴走する科学者賢治を宗教家賢治がた  
しなめる、そして宗教家として教条的、  
独善的になるところを芸術家賢治の情  
熱と洞察力とが和らげる。三つの世界  
観が互いにせめぎ合い、かつ励まし合  
って出来たのが賢治の作品世界で、こ  
れはじつに予言的です…」

（「イーハトーボの劇列車」前口上より）

そして「イーハトーボの劇列車」。先にも  
触れましたこの宮澤賢治の評伝劇は、  
1980年が初演、その後何度か再演されて  
いましたが、昨年11月に新宿サザンシア  
ターで久しぶりの上演となりました。私  
にとっては初めて観る作品です。賢治の  
生涯を、心ならずもこの世を去っていく  
農民たちが、劇中劇で描くという仕掛け  
になってる。この芝居に花卷は登場せず、  
舞台は賢治が上京する列車の中と東京で  
の立ち回り先です。最愛の妹トシの死、  
農民を自認する賢治の理想と矛盾、広場  
に象徴される賢治の祈り、それら万感の  
思いをこめて、この世に思いを残しなが  
ら死の世界へ向かう列車に乗りこむ人々  
の「思い残し切符」がラストシーンの劇  
場に撒かれます。「銀河鉄道の夜」をは  
じめ賢治作品の要素をたくみに盛り込み  
ながら、今を生きる私たちに重く深いメ  
ッセージを伝えます。

あの震災から3年、突然の災害にみま  
われた多くの方々の思いを、この「思い  
残し切符」に重ねていました。

12月の花卷は雪が舞う寒い日でした。  
在来線花卷駅にほど近いところに地元で  
評判のラーメン屋さんがあり、足を運ん  
でみました。開店時間の少し前でしたが、  
お店の方があたたかく声をかけてくれま  
した。暮れも押し迫ったお昼前、家族連  
れや老夫婦、若いカップルなど地元の方  
が次々とやって来ます。一番人気は、き  
ざんだキャベツとき卵のあんかけで仕  
上げた「ごんめん」。私も、熱々の湯気  
の中で温まりました。



賢治作品のあじわいを感じる花卷駅待合室の表示



こまつ座「イーハトーボの劇列車」チラシ